

主 題：聖霊と私3

聖書箇所：ローマ人への手紙 8章11節

「イエス・キリストを信じて救われることは聖霊をいただくことである」と、パウロはそのことを私たちに教えてくれました。そして、救われた者に与えられているすばらしい祝福について、特にその中の二つのパウロの教えを見て来ました。一つは、新しく生まれ変わる「新生」であり、もう一つは死からよみがえる「復活」です。神はこの二つの祝福をイエス・キリストを信じる私たちにくださったのです。9節では「神の御霊の内住」ということを教えてくれました。10節では「キリストの内住」ということを教えました。パウロはこの9節から11節で「内住」、私たちの内に住んでくださるということを見せているのです。

☆救われた者への二つの祝福、「新生」と「復活」について

A. 神の御霊の内住 = 新生の祝福 9節

9節には「もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、」とあり、つまり、あなたが聖霊なる神をいただいたということは、あなたが救われたということです。

1. 神との新しい関係：あなたは神と新しい関係を持つ者へと変わったのです。聖霊なる神があなたの内にあつかもご自分の家であるかのように住んでくださる、住み続けてくださる、一時的に居てまた離れてしまうのではなくて、あなたの内にずっと住み続けてくださるのです。神はそのようなすばらしい祝福を信じる者にしてくださったのです。

2. 新しい主人：新しい関係を得ただけではありません。同時に、私たちは新しい主人をいただきました。かつての私たちは罪の奴隷でした。罪が私たちの主人でした。しかし、私たちはそこから救い出されて神の奴隷となった、神のしもべとなったのです。そして、神の奴隷となった私たちは救われたことが私たちの生き方にも反映して行くということを見て来ました。本当に救われていることはその生き方に明らかにされるのです。なぜなら、神が私たちの内にいてくださるからです。

B. キリストの内住 = 復活の祝福 10節

10節「もしキリストがあなたがたのうちに住んでおられるなら、」と、私たちはここでキリストがあなたに内住しておられるというパウロの教えを見ました。

1. 神との新しい関係：私たちは神と新しい関係をいただきました。聖霊と親しい関係にあるだけでなく、聖霊が内に住んでいるだけでなく、イエス・キリストも私たちと親しい関係にあり、私たちの内に住んでくださると言います。イエス・キリストがあなたの内に住んでおられるゆえに、あなたは彼と同じようによみがえるとパウロは教えたのです。「このことに驚いてはなりません。」とイエスがヨハネの福音書5：28で教えておられます。「墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。：29 善を行なった者は、よみがえっていのちを受け、悪を行なった者は、よみがえってさばきを受けるのです。」（ヨハネ5：28-29）。私たちはよみがえる、そして、よみがえった後に何があるのでしょうか？私たちの罪のさばきではありません。私たちの罪はすべて清算されました。私たちはよみがえるときに、この主から信仰者として歩んだその報いをいただくのです。ですからパウロは、確かにからだは罪ゆえに滅んで行く、罪ゆえにあなたは死を経験するでしょう、しかし、あなたはそれで終わってしまうのではなくて、必ずよみがえるということはこの10節で教えたのです。そして、11節ではさらに「神の御霊の内住」について教えて行きます。

C. 神の御霊の内住 = 復活の保証 11節

11節「もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、」と、「聖霊があなたの内に住んでいるなら」ということにまた戻ります。パウロはここで敢えてこのように教えて、そして、あなたがよみがえることは間違いのない事実である、あなたは必ずよみがえると、その保証をここで教えようとするのです。私たちはただそのように信じて自らを慰めているとか、互いに慰め合っているというのではなく、あなたは必ずよみがえる、復活するというその保証をここで与えるのです。あなたや私がよみがえるというその「復活の根拠」は何でしょう？実は、イエス・キリストの復活なのです。イエス・キリストがよみがえって来たというこの事実が、私たちが必ずよみがえるということをお教えるのです。そこでパウロは、コリント人への手紙第一15章の復活を記したところでこのように教えています。13節「もし、死者の復活がないのなら、キリストも復活されなかったでしょう。」、ということは、キリストが復活されたという事実はあなたもよみがえるということの意味するということです。16節「もし、死者がよみがえらないのなら、キリストもよみがえらなかったでしょう。」、でも、キ

リストがよみがえったという事実は、あなたも必ずよみがえるということを証していると言います。ですから、私たちの信仰の土台は、イエス・キリストが十字架で亡くなり、そして、三日後にその死から敢然とよみがえって来た、この復活にかかっているのです。

今でも忘れることが出来ないことがあります。ある一人の女性との話です。私は彼女のバプテスマ式を見ました。信仰告白をしてバプテスマを受けているその様子を見ていました。その後、暫くして彼女と出会って、そのときは学びをしており復活のことを話していたのですが、彼女はこのような言うのです。「私は復活を信じる事が出来ません。」と。皆さんが今衝撃を受けているように私も衝撃を受けました。いったい何を言っているのだろうと思いました。なぜなら、私たちの救いのメッセージはイエス・キリストが十字架で死んだだけではありません。その主が三日後によみがえって来たのです。だから、救いがあるのです。だから、彼は救い主なのです。ひょっとして、皆さんもいろいろな方と話していて、キリストの復活という出来事に対して、それは信じ難いことだと言われることがあるかもしれません。覚えていますか？パウロがアテネに出かけたときに、パウロはそこでキリストのことを話します。主イエス・キリストのことを人々に話しました。アテネのアレオパゴスの丘の真ん中に立って、パウロがある話を始めるのです。そうすると、人々は笑いながら「その話はまたいつか聞きましょう」と言ってその場を去って行きます。アテネの人々はいつも関心を持っていろいろな話を聞いていました。ですから、パウロの話も興味深く聞いたのです。でも、ある話になると彼らはあざ笑ってその場を去ったと。パウロが語ったことは「復活」のことでした。使徒17：32-33「**死者の復活のことを聞くと、ある者たちはあざ笑い、ほかの者たちは、「このことについては、またいつか聞くことにしよう。」と言った。：33 こうして、パウロは彼らの中から出て行った。**」。イエス・キリストの復活をなかなか信じる事が出来ない、信じ難い出来事だと言う人々は、どの時代にもどこにもいます。皆さんの周りにもおられることでしょう。

しかし皆さん、イエス・キリストの復活というこの出来事は私たちの信仰にとっても大切な出来事です。ですから、今少し、私たちは「イエス・キリストの復活」ということについて考えたいのです。

主イエスの復活の事実

1. 歴史家による証言：フラビウス：ヨセフス

イエス・キリストの復活は本当なのか、事実なのか？それを知るために一人の歴史家を紹介します。フラビウス・ヨセフスです。この人物は紀元37年から100年位に生きたユダヤの歴史家でした。紀元66年から70年にかけて行われたローマとの戦い、ユダヤ戦争に負けた後、彼はローマに行くのですが、ローマの地において彼は「ユダヤ戦記」、また、「ユダヤ古代史」を書きました。この文献はユダヤ史を知るために、また、キリスト教史を知る上で非常に貴重な文献だと言われていて、今も残っています。そのヨセフスが書いた「ユダヤ古代史」の中にこのようなことが記されています。「さて、この頃イエスという賢人一実際に、彼を人と呼ぶことが許されるなら一が現れた。彼は奇蹟を行なう者であり、また、喜んで真理を受け入れる人たちの教師でもあった。そして、多くのユダヤ人と少なからざるギリシャ人とを帰依させた。彼こそはキリストだったのである。ピラトは彼が我々の指導者たちによって告発されると十字架刑の判決を下したが、最初に彼を愛するようになった者たちは、彼を見捨てようとはしなかった。すると彼は、三日目に復活して彼らの中にその姿を見せた。すでに神の預言者たちは、これらのことや、さらに彼に関するその他無数の驚嘆すべき事柄を語っていたが、それが実現したのである。なお、彼の名にちなんで「クリスティアノイ」（これはキリスト教徒という意味ですが）、キリスト教徒と呼ばれる族はその後現在に至るまで、連綿として残っている。」と。

歴史家が歴史上の出来事として、このイエス・キリストの復活をこのように記しています。確かに、歴史上に起こった出来事であると。もちろん、私たちはそのような歴史家だけの話ではなく、この聖書の中を見て、確かに、そのことは旧約の人たちによっても預言されていたと知っています。

2. 旧約からの預言

ダビデ王もこの復活のことを予見していたとペテロが語っています。使徒の働き2章にはペテロがエルサレムで語ったメッセージが記されています。使徒2：31-32「**それで後のことを予見して、キリストの復活について、『彼はハデスに捨てて置かれず、その肉体は朽ち果てない。』と語ったのです。：32 神はこのイエスをよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です。』、「後のことを予見して、」言ったのはだれなのでしょう？文脈を見るとダビデのことです。これは旧約聖書の詩篇16篇から引用されているみことばです。ですから、ペテロは言うのです。「ダビデはイエス・キリストの復活のことを予見していた。」と。また、実はそのことをイザヤも私たちに教えてくれています。イザヤ53：10をご覧ください。もちろん、その当時はイエス・キリストの名はありませんが、救世主の身代わりの死が預言されている箇所です。「**しかし、彼を砕いて、痛めることは主のみこころであった。』、「砕いて、痛める」とは十字架のことです。それは神のみこころであったと言うのです。だからイザヤは、この人物は自分が十字架に架かるような悪いことをした結果十字架で苦しむのではないと言うのです。十字架に架かるようなこと****

をしていない彼が十字架で死ぬということ、それが実は神の計画だったと言っているのです。次を見てください。「もし彼が、自分のいのちを罪過のためのいけにえとするなら、」と目的が出ています。彼は何のために十字架で死ぬのか、人間の罪の身代わりなのです。人間の罪のいけにえ、その罪が赦されるために犠牲として払われるものです。だから、イエス・キリストの死は「罪の身代わり」なのです。彼の死のことが話されているのです。その後を見てください。「彼は末長く、子孫を見ることができ、主のみこころは彼によって成し遂げられる。」と、皆さん、子孫を見るためには死んでしまっていては不可能です。生き返って来なければいけないのです。「よみがえり」の話をするのです。そして、「主のみこころは彼によって成し遂げられる。」と、つまり、主のみこころ、神が私たち罪人をあわれみ、私たちに救いを備えてくださった、神の計画だったのです。そして、それを成し遂げるために主イエス・キリストがこの世に来られ、身代わりとなって十字架で死に、そして、彼はその死からよみがえると、イザヤもその様に預言していました。ですから、旧約聖書でもその様にこの方が死んだ後必ずよみがえるということを約束しているのです。

3. イエスがおられた当時の人々の証言

フェストという一人の総督の証言があります。だれに対するものでしょう？カイザリヤを訪問したアグリッパ王とベルニケに対して、パウロが捕えられた理由についてこのフェストが話をしているところが、使徒の働き25章に記されています。25：18－19「訴えた者たちは立ち上がりましたが、私が予期していたような犯罪についての訴えは何一つ申し立てませんでした。：19 ただ、彼と言い争っている点は、彼ら自身の宗教に関することであり、また、死んでしまったイエスという者のことで、そのイエスが生きてるとパウロは主張しているのです。」、フェストはよく分かっていたのです。どうして人々がパウロを訴え出ているのか、どうしてパウロが捕えられたのか、それはパウロが特別に悪いことをしたからではない、彼はあるメッセージをしていたから、それはイエス・キリストがよみがえったというメッセージでした。そして、彼はそれゆえに捕えられたということを、フェストがアグリッパ王に説明しているのです。この証言を見るだけでも、パウロがいのちがけで何を語っていたのかが分かります。復活です。ですから、パウロやまた、弟子たちの証言も見て行きます。

4. 弟子たちによる証言

1) ペテロの証言：先程見たように、使徒の働き2章ではペテロ自身の証があります。エルサレムにあって多くの人々の前で、ペテロはイエス・キリストの復活に関してこのように言います。使徒2：24「しかし神は、この方を死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、ありえないからです。」とペテロはイエスはよみがえったとはっきり話しています。

2) パウロの証言：そして、パウロも使徒の働き13章の29節と30節でこう言っています。アンテオケにおけるパウロ自身のメッセージです。「こうして、イエスについて書いてあることを全部成し終えて後、イエスを十字架から取り降ろして墓の中に納めました。：30 しかし、神はこの方を死者の中からよみがえらせたのです。」

このようにペテロもパウロも「イエス・キリストはよみがえった」と証言しました。なぜなら、彼らはよみがえったイエス・キリストを見たからです。思い出しませんか？パウロがコリント人への手紙の第一15章で、キリストの復活に関して話をしたときに、イエス・キリストはいろいろな人にご自身を現わされたと記されています。1コリント15：5－8「また、ケパに現われ、それから十二弟子に現われたことです。：6 その後、キリストは五百人以上の兄弟たちに同時に現われました。その中の大多数の者は今なお生き残っていますが、すでに眠った者もいくらかいます。：7 その後、キリストはヤコブに現われ、それから使徒たち全部に現われました。：8 そして、最後に、月足らずで生まれた者と同様な私にも、現われてくださいました。」、つまり、彼らがいのがけでキリストの復活を証言したのは、彼らが見たからです。イエスがよみがえったことを彼らが実際に自分の目で見たから、そして、彼らはイエス・キリストのそのみからだに触れているから、復活が本当に起こったことだと彼らは確信したから、だから、いのがけで語ったのです。見たことを伝えないわけにはいきませんと言っています。

確かに面白いことは、ペテロのメッセージを見て、実際イエスが亡くなってから、そして、イエスがよみがえってからまだ2ヶ月も経っていないのです。だから、ペテロのこのようなメッセージを聞いたなら、その当時の人々は、イエス・キリストの十字架、イエス・キリストが亡くなったときのいろいろな出来事や復活のことも聞いていたはずです。ですから、彼らが偽りを言っているなら、聞いていた人々はそこで反対したはずです。でも、だれも反論できなかったのです。

パウロはこのイエス・キリストの十字架と復活、これが大切なのだということを言いました。1コリント15：3－4「私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、：4 また、葬られたこと、また、聖書に従って三日目によみがえられたこと、」、なぜこれが大切なのでしょうか？これが「福音」だからです。パ

ウロはこう言っています。I コリント 15 : 2 「また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音の**ことばをしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。**」と、これが救いのメッセージだからです。キリストは私たちの罪のために死なれ三日後によみがえった、あのイエスの十字架は私の身代わりであり、約束通りその死の三日後によみがえって来た、このイエス・キリストを信じる信仰によって信じるすべての者は、例外なく救いに至るのです。救われるのです。

ですから、パウロはキリストの十字架と復活を語ったのです。ですから、先のように、イエスの十字架は信じるけれど、復活は信じないというのはおかしいことです。

5. 「主日」を守ることによって 一安息日ではなく「主日」を祝う一

今日のテキストに戻って、8章11節、パウロはここで「よみがえり」を繰り返しています。「もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、」と、「よみがえらせた」ということが繰り返されています。それによってパウロはこれが歴史的な事実であることを強調するのです。歴史的に起ったことです。その証拠として、私たちはなぜこのように週の初めの日曜日の朝に集まっているのでしょうか？イエス・キリストを信じたユダヤ人たちも、なぜ、これまでのように金曜日の日没から土曜日の日没までの安息日を守らないで、週の初めの日に集まるのでしょうか？この日に教会が開くから？違います。私たちは復活の主を覚えて集まっているのです。キリストが週の初めの日に、その死より敢然と肉体をもってよみがえられた、それを覚えて、私たちの主、よみがえられた主を覚えて、その方を礼拝するために集まって来ているのです。

「主日」が始まったのです。こうして、日曜日、主の復活を覚えて集まるその集まりが約2000年間続いているのです。なぜ？キリストの復活を見たからです。

主イエスの復活のみわざ

1. 父なる神のみわざ

そのイエスの復活をパウロは強調するのですが、11節を見てください。「もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の、」とあります。ですから、だれがイエスをよみがえらせたかをパウロは教えるのです。それは父なる神です。父なる神がイエスをその死からよみがえらせたのです。

2. 聖霊なる神のみわざ

ところが面白いことは、その「**方の御霊が、**」とあります。なぜ、パウロはこのような書き方をしたのでしょうか？思い出してください。9節には「**キリストの御霊**」とありました。それはイエス・キリストと密接に関係している人、聖霊なる神のことです。聖霊なる神はイエス・キリストとそのように親しい関係にあると見て来ました。パウロは11節で「父なる神」と「聖霊なる神」のその親しき交わり、親しい関係を表わしました。ただ父なる神を敢えてこのように具体的に説明したのです。父なる神が為さったことの一つがイエス・キリストを死からよみがえらせること、このような働きを為さった父なる神と聖霊なる神とが親しい交わりにある、密接な関係にあるということを言っているのです。だから、父なる神がイエス・キリストの復活に関わった、でも、パウロがこのように言うことによって、密接であるゆえに、聖霊なる神もイエス・キリストの復活に関わっているのです。

それだけでないのです。実は、イエス・キリストご自身もご自身の復活に関わっているのです。ヨハネ10:17-18を見てください。「**わたしが自分のいのちを再び得るために自分のいのちを捨てるからこそ、父はわたしを愛してくださいます。:18 だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。**」と、つまり、イエスはここで「**わたしが十字架で死んで行くことはわたしの選択だ。**」と言われるのです。だから、イエスは十字架の上で「**父よ。わが霊を御手にゆだねます。**」

(ルカ23:46)と言われました。この様な選択をされて、その様にイエスは歩まれたのです。いやいやながら十字架に引いて来られたのではないのです。無理矢理にイエスを十字架につけたのではないのです。イエスは自分から進んで十字架に架かれたのです。ご自身の意志です。そして「**わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。**」、イエスご自身の権威をもって、ご自身のいのちを私たちのために犠牲としてくださり、そして、ご自身の権威をもってそれを得ることができると言われるのです。つまり、復活に関してはイエスご自身も関わっているのです。なぜなら、それが私たちの神だからです。父、子、聖霊なる唯一の神です。それぞれに関わっているのです。イエス・キリストの復活という出来事に関して、父なる神は確かにその行動を為さる、しかし、そこに聖霊なる神の働きがあり、そして、イエス・キリストご自身の働きがある。これが私たちの神なのです。そのことをパウロはこの11節で教えるのです。

私たちの復活の保証：聖霊の内住

そして、そのことを教えた後、このように言います。11節「**あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです。**」と。パウロがここで述べたことは、イエス・

キリストをその死からよみがえらせてくださった、その御霊があなたのうちにいてくださるというこの事実が、あなたも同じようによみがえって来るということをも裏付けるということです。この御霊、聖霊なる神が「住んでおられる」とあります。「あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって」と、継続して「住んでいる」という現在形です。その後、「あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです。」、とありますが、「生かしてくださる」という動詞は未来形です。これはこれから先に起こることです。しかし、聖霊なる神が私の内に住んでおられる、聖霊なる神はイエス・キリストをよみがえらせた方である、だから、あなたも同じようによみがえると言うのです。

ペテロが I ペテロ 1 : 3 でこのように言いました。「私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちが新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。」、「イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって」、この救い主によって信じる一人ひとは新しく生まれ変わる、それだけでなく、望みを持って生きる者へと生まれ変わったのです。私たちクリスチャンは永遠の希望を持って今日を生きる者たちです。私たちはよみがえるのです。その様な希望を主は私たちに与えてくださったのです。

この「よみがえり」に関して、幾つかのみことばを見たいのです。非常に大切なことなので皆さんの理解を整理しておきたいと思います。

よみがえりについて

使徒の働き 24 : 15 を見てください。「また、義人も悪人も必ず復活するという、この人たち自身も抱いている望みを、神にあって抱いております。」と書かれています。パウロはここで「義人も悪人も必ず」よみがえると言います。つまり、すべての人がよみがえると言っているのです。よみがえりに関して、ヨハネの黙示録 20 章を開いてください。20 : 6 「この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対しては、第二の死は、なんの力も持っていない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王となる。」とあります。さて、興味深いことばが出て来ました。「第一の復活」、「第二の死」と書かれています。ということは、「第一の復活」とともに「第二の復活」がある。「第一の死」があつて「第二の死」がある。このように「二つのよみがえり」と「二つの死」があるのです。

二つのよみがえり 第一の復活と第二の復活

第一の復活とは？—この 6 節を見て「この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。」と分かります。ですから、「第一の復活にあずかる者」は救いをいただいている人のことです。罪が赦されて救われている人がよみがえる、そのよみがえりがこの「第一の復活」という意味です。これはイエス・キリストの空中携挙、そして、地上にイエスが帰って来られる、その様な時間をすべて含みます。イエスが私たちクリスチャンを迎えに来てくださるとき新約の人々がすべてキリストの元に引き上げられます。そして、イエス・キリストがクリスチャンを伴って地上に帰って来られるときに、旧約時代や患難時代の聖徒たちがよみがえって来ます。ですから、このように時間的に幅があるのです。これがすべて「第一の復活」です。クリスチャンのよみがえり、救われている者たちのよみがえりです。

第二の復活とは？—では、「第二の復活」とは何でしょう？ 20 : 5 を見てください。「そのほかの死者は、千年の終わるまでは、生き返らなかつた。これが第一の復活である。」と記されています。「千年の終わるまで、は生き返らない」とは何を意味するのでしょうか？千年の終わりにはよみがえるのです。そうすると、ある人たちは空中携挙と地上再臨をもってよみがえり、ある人たちはその後続く千年王国の後によみがえるのです。そして、よみがえったときどうなるのかということが 20 章 11 節から書かれています。「また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。」、その方の前に一人ひとり立って、一人ずつさばかれる様子がこの 11 節から 15 節までに記されているのです。ですから、「第二の復活」は千年王国が終わった後に起こるよみがえりのことです。そして、ここでよみがえる人々はこの神の救いをいただいていない人々、その人たちがすべてよみがえって来て、すべて神の前に立って、それぞれの罪がさばかれるのです。これが「第二の復活」です。

ですから、「第一の復活」は救われている人のためであり、「第二の復活」は救われていない人のための復活です。これが「第一の復活」と「第二の復活」です。それでは「第一の死」と「第二の死」とは何でしょう？

第二の死とは？—「第二の死」に関しては先ほど読んだ 6 節に「第二の死は、なんの力も持っていない。」とありました。だから、「第二の死」は救われている者たちには何の影響も及ぼさないということです。そして、20 : 14 - 15 を見てください。「それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。：15 いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。」と書かれています。ですから、「第二の死」は「永遠の火」と関連しているのです。この「永遠の火」のことを「ゲヘナ」と呼びます。ゲヘナは今もイスラエルに行くにあります。ヒノムの谷です。旧約の時代にも、人々

はその火の中を自分の子どもを通らせたなどと、そのようなむごたらしいことがなされたり、後にはゴミ捨て場となって常に火が燃えているような、そういう場所です。そこからゲヘナ、ヒノムの谷と呼ばれているのです。そして、そこが地獄を指すところと言われたのです。ですから、「火の池」と記されています。人々はそこに送られると、それが「第二の死」というのです。

というのは、皆さん、もう罪が赦されている人々は、死んだ後よみがえって、その後主とともに永遠を生きるのです。ですから、その人に死は関係ないのです。死ぬことはないのです。ところが、救いをいただいていない人は、よみがえった後、さばきを受けてゲヘナ、火の池に投げ込まれて、永遠にそこで昼も夜も苦しみを受けるのです。これを「第二の死」と呼んだのです。ですから、救われている者にとってさばきは無縁のものです。救われている者に地獄は無縁です。ですから、私たちに「第二の死」は何の影響も及ぼさないのです。確かに、「第一の死」、私たちは肉体的に罪ゆえに死に向かっています。それはあくまでも肉体の死なのです。しかし、その後、私たちは永遠に地獄で苦しみ続けることはないのです。私たちはそこから救い出されたからです。でも、罪が赦されていない人には「第二の死」が約束されているのです。それぞれが神の前に立って罪が明らかにされて、だれ一人として神の前に弁解ができないのです。罪が明らかにされるからです。そして、その上で一人ひとりはこの火の池に投げ込まれてそこで永遠の苦しみを味わうと、みことばはその様に警告しているのです。

私たちがよく聞くことは、地獄に行っても楽しいのではないか、いろいろな友だちに会えるからというようなことです。今、時間がないのでみことばを皆さんに紹介することができませんが、また、いずれどこかに書いて皆さんにお配りします。

「火の池」(＝地獄)とは？

○孤立している＝地獄という場所はそのような場所ではなく孤立しています。みなでワイワイできるような所ではありません。次の箇所です。次のように教えています。

マタイ 8：12 「しかし、御国の子らは外の暗やみに放り出され、そこで泣いて歯ざしりするのです。」

マタイ 22：13 「そこで、王はしもべたちに、『あれの手足を縛って、外の暗やみに放り出せ。そこで泣いて歯ざしりするのだ。』と言った。」

マタイ 25：30 「役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出しなさい。そこで泣いて歯ざしりするのです。」

Ⅱペテロ 2：17 「この人たちは、水の無い泉、突風に吹き払われる霧です。彼らに用意されているものは、まっ暗なやみです。」

ユダ 13 「自分の恥のあわをわき立たせる海の荒波、さまよう星です。まっ暗なやみが、彼らのために永遠に用意されています。」

○死なない＝また、地獄ではその人は永遠に死ぬことはありません。苦しみながらずっと生き続けるのです。

イザヤ 66：24 「彼らは出て行って、わたしにそむいた者たちのしかばねを見る。そのうじは死なず、その火も消えず、それはすべての人に、忌みきらわれる。」

マルコ 9：43 「…ゲヘナの消えぬ火の中に落ち込むよりは…」

○悲しみ＝また、そこは悲しみの場所です。どんなに後悔しても後悔しきれないのです。なぜなら、後悔してもそこから救われることはないからです。人は死んだ後に救いは残っていないのです。生きている間しか救いを得ることはできません。そこは悲しみの場所であると教えます。

マタイ 8：12 「しかし、御国の子らは外の暗やみに放り出され、そこで泣いて歯ざしりするのです。」

マタイ 13：42 「火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ざしりするのです。」

マタイ 13：50 「火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ざしりするのです。」

マタイ 22：13 「そこで、王はしもべたちに、『あれの手足を縛って、外の暗やみに放り出せ。そこで泣いて歯ざしりするのだ。』と言った。」

マタイ 24：51 「そして、彼をきびしく罰して、その報いを偽善者たちと同じにするに違いありません。しもべはそこで泣いて歯ざしりするのです。」

マタイ 25：30 「役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出しなさい。そこで泣いて歯ざしりするのです。」

ルカ 13：28 「神の国にアブラハムやイサクやヤコブや、すべての預言者たちがはいっているのに、あなたがたは外に投げ出されることになったとき、そこで泣き叫んだり、歯ざしりしたりするのです。」

○神の怒り＝そして、その場所は神の怒りがあるところです。神の怒りの場所であると言います。

ローマ 5：9 「ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。」

Ⅰテサロニケ 1：10 「また、神が死者の中からよみがえらせなされた御子、すなわち、やがて来る御怒りから私たちが救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになったか、それらのことは他の人々が言い広めているのです。」

Ⅰテサロニケ 5：9 「神は、私たちが御怒りに会うようにお定めになったのではなく、主イエス・キリストに

あつて救いを得るようにお定めになったからです。」

ダニエル書 12 : 2 を見てください。「**地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。ある者は永遠のいのちに、ある者はそしりと永遠の忌みに。**」、ある者たちは永遠のいのちに至るのですが、そうでない人たちはどうなるのか、ここでダニエルが教えているのです。その人たちは「**そしりと永遠の忌みに**」、「**そしり**」とは「非難、叱責」です。つまり、神はその人たちを非難されるのです。その人たちを叱責される、彼らを咎められるのです。彼らの過失、不正を…。そのような場所だと言います。もう一つ、「**忌みに**」とあります。しかも、そこには「**永遠の**」と記されています。この「**忌み**」とは「嫌悪、憎悪、忌み嫌う」という意味があります。ということは、このダニエル 12 : 2 で言っていることは、永遠のいのちに至らない残されたグループの人たち、つまり、神を信じていなかった人たちはどうなるのか、彼らは神の前で神によって非難され、そして、永遠に神が忌み嫌う存在として苦しみを受け続けるということです。神が憎む者、汚れた者として神に嫌われる、その様な存在として永遠のさばきに至ると言います。聖い神は罪を赦すことができません。その人が神の前に赦しを求める以外には、罪を持ったままでは神がその人を喜んでお受けになることはないのです。罪を赦して欲しいと神の前に助けを求める人を神は赦してくださる、罪の赦しがなければ神の前に立つことはできないのです。

今日、パウロは私たちにクリスチャンだけに与えられているすばらしい希望を教えてくださいました。聖霊なる神があなたの内にいるなら、主イエス・キリストの復活に関わった聖霊があなたの内にいるなら、あなたは必ずよみがえるのです。死ぬべきからだは死にます。なぜなら、前回見たように、罪ゆえに私たちは死ぬ者となったからです。しかし、私たちは栄光のからだをいただくというすばらしい約束をいただきました。あなたはこの永遠の希望をいただいているという、その希望によって生きていますか？そのことを喜びながら生きていますか？

昨日も葬儀の帰りに車の中で思わず話したことは「救われているということは感謝だな。死んで終わらない。死んで永遠の滅びに行かない。私たちには神がすばらしい永遠のいのち、天国を約束してくださっている。救われているって感謝だね…」でした。皆さん、そのように思われませんか？あなたは今日死んでも主の元に上がるのです、天国に行くのです。私たちを愛してくださった方にお会いして、その方とともに永遠を過ごすのです。このような祝福は私たちにふさわしいですか？でも、神はこの祝福をあなたや私にくださったのです。だから、私たちがその祝福を本当に覚えているなら、私たちは今日どのように生きるのかということを考えませんか？なぜなら、明日がないかもしれないからです。今日が最後かもしれないと、信仰者はそのように生きたのです。

1945年のことです。あのナチスのヒットラーによって投獄された一人の信仰者がいます。ゲートルリッヒ・オッフエンファーという人物です。極悪な親衛隊によって彼は処刑されて行きます。処刑されるために引き出されて行くその前に、彼は神がイエス・キリストを死者の中からよみがえらせることによって与えられた私たちの生ける希望について、先ほど私たちが見た I ペテロ 1 : 3 を見ました。そのみことばを見て彼は仲間の囚人たちに自分の希望を語り始めるのです。監視たちが彼を連れ去ろうとしたときに、彼は友人である監督ベルに最後のことばを送ったのです。そこにはこのように書いてありました。「これが最後です。しかし、私にはいのちの始まりです。」と。こうして彼は殉教して行くのです。

クリスチャンにとって「死」は終わりではありません。私たちにとって死は私たちの主にお会いするそのときです。私たち信仰者はその希望をいただいたのです。その信仰を皆さん誇っていますか？この希望を喜んで感謝して人々に伝えていきますか？私たちの周りには余りにも多くの人たちが永遠の滅びへと向かっているのです。私たちがこのすばらしい救いを自分だけのものにしてはならないのです。そうするために神はあなたを救ったのではありません。出て行って伝えなければいけない、このキリストに希望があることを、ここに救いがあることを。なぜなら、彼はあなたの身代わりに十字架で死んで、約束通りに三日後によみがえって来られた唯一の救い主だからです。この方にだけ救いがあるのです。なぜなら、この方だけがあなたの罪の代価を支払ってくれたからです。立ち返りなさい、悔い改めてこの主イエス・キリストに戻りなさい、この方を受け入れて、この救いをいただきなさいと、あなたや私には語る責任があるのです。

パウロはこのすばらしい希望を教えた後、その希望をいただいた者としてどのように生きて行くのかを、この 12 節から教えてくださいます。そのことは次回、ごいっしょに学んで行きます。信仰者の皆さん、大切なことは今日どう生きるかです。希望をいただいた者として、救われた者として今日を生きてください。この祝福をいただいた者にふさわしく！